

日本人英語の特徴とハワイ・クレオールの特徴点

－日本人ビジネス・パーソンへのインタビューによる ケース・スタディー－

大 島 希巳江*

[要旨] 日本人が使用する英語の特徴には、ハワイ・クレオールに共通する特徴がいくつか見られる。ハワイ・クレオールでは体系的な規則が確立されている語形変化がある。しかしそれと同様の特徴を持つ日本人の英語については単なるエラーであると指摘されることが多い。今回の調査では日本人のビジネス・パーソンを対象にインタビュー調査を行い、国際社会で機能している日本人の英語の特徴をハワイ・クレオールのそれと比較し、英語の普遍的パターンに則している点の仮説を構築した。

1. はじめに

日本人の話す英語は長いこと批判されてきた。日本人英語を未熟な劣ったものであるとする著書も多い¹⁾。日本人英語の特徴として、発音や文法のエラーを数多く指摘し、それが日本語特有の母語干渉によるものである、という主張も絶えない²⁾。しかし、これらの多くは英語学習者の英語を対象としたもので、英語使用者の英語について言及されることは極めて少ない。英語学習者の英語が未熟なものであり、エラーが多いという見解は当然あるとしても、日本人英語使用者の英語については、それらをエラーと呼べるのであろうか？それはむしろシングリッシュやインド英語のようなニューイングリッシュや世界各地のピジン英語やクレオール英語などに見られる特徴のように、日本人英語の特徴と呼べるものなのではないだろうか。

以前からハワイのピジン英語とクレオールの研究をしてきた筆者は（大島、2001）、日本人英語使用者の英語がピジンやクレオールに共通する特徴に非常に似ていると感じていた。確かに、そもそもピジンやクレオールの文法的特徴は、学習者の母語にかかわらず英語学習者に多く見られるエラーに共通する部分が多いということが指摘されている。英語学習者の誤用により発生する中間言語は、英語の習得過程において学習者自身が作り上げる構造的な規則体系を含んでいるのである。それらのいくつかには、冠詞や複数形概念の欠落、過去形の過剰一般

* 准教授／社会言語学

化、母語にない表現の回避などが含まれる。これらのことから、日本人英語の文法的特徴は単純に英語学習者としてのエラーが化石化したものではないか、という可能性も考えられる。

しかしだからこそ重要な点は、世界中のピジン、クレオール、ニューイングリッシュ、英語学習者たちの英語など、様々な英語に日本人英語が似ているということである。英語の余剰性を取り払った結果、コミュニケーションに必要な要素を残した英語が、これらのネイティブ以外の英語である。これは、日本人の英語を劣等視する態度を見直す1つのきっかけとなるのではないだろうか。

本論では、日本人英語使用者の英語とピジン・クレオールの比較をしたい。しかし実際には、英語学習者と英語使用者の線引きは難しい。本論では日常的に英語を使っており、英語でのコミュニケーションに問題がないという自覚がある者を英語使用者とした。そして日常的に英語を使って仕事をしている日本人ビジネス・パーソンを英語使用者として被験者に選んだ。仕事をしていて支障がないということは、英語を学習しているのではなく英語を使用しているといえる。さらに被験者を選ぶ際、英語の専門家、バイリンガル、留学経験者などを除く30代～60代のビジネス・パーソン6名に絞った。

ピジン・クレオールの特徴として挙げられているいくつかの文法的項目と、日本人の英語使用者であるビジネス・パーソンの英語に見られる文法的特徴を比較し、共通する点を観察する。調査方法は英語によるインタビューとし、日本人英語の文法的特徴を記録し、ハワイ・クレオールと比較することを目的とする。

2. ハワイ・クレオールとピジン英語

まず、ピジンとクレオールの定義を明確にしたい。Todd (1974) によると、ピジンとは共通語を持たない人々の間に起こる、ある限られたコミュニケーションの必要を満たすために生まれる周辺的な言語である、と定義されている。そのため、統語構造は接触した言語の構造よりも簡略化されるという特徴を持つ。もしくは、ホルムによると「共通の言語を持たない人々の間で接触が広がる結果生じる縮小化された言語。これは貿易のように言葉を用いてコミュニケーションをする必要があるが、相手を信用できないとか、今まで密接な接触がなかったというような社会的な理由によって相手の言語をどちらも学ぼうとしないときに発生するものである (Holm, 1988, pp.4-5)」と定義され、文法と語彙が縮小化される一方で音韻的な変異は豊かである、としている。

また、一方でクレオールはピジンがある言語社会の母語となると、生まれるものとされている。単純化された言語構造は受け継がれるが、語彙は拡大し、より精巧な統語体系が発達する (Todd, 1974)。つまり、お互いの言語を話せない者同士がなんとかコミュニケーションをとるためにその場で発生する言語がピジンであり、なんらかの理由でピジンを話す両親や社会で育った者が話す言語がクレオールである。ピジンは構造も発音も簡略化される傾向にあり、逆

にクレオールはピジンよりも洗練されたもしくは体系化された言語に発達する 경우가ほとんどである。

ハンコック (Hancock, 1977) によると、世界各地には 127 のピジンとクレオールが存在し、その中でも最も多い 35 種類は英語基盤のものであるとしている。代表的な英語基盤のピジンもしくはクレオールとして挙げられているものの 1 つが、ハワイのピジンおよびクレオールである。ピジンとクレ奥ールの定義から考えると、現在でもハワイでピジン英語とよばれている現地の言語はピジンではなくクレオールと呼ばれるべきものである。

1850 年代から積極的に移民を受け入れてきたハワイの多民族社会では、多くの移民の言語が接触した結果として彼ら独特の言語を発達させてきた。初期の移民たちが他の移民とコミュニケーションをとるために生じたものが英語を基盤としたピジン英語であり、これを話す者は現在ではもうほとんどいない。このピジンを母語として育ってきた世代が何世代にもわたっており、彼らが話す言語は実質的にはクレオールである。しかし、ハワイではこれを一般にピジン英語と呼んでいるために、混乱しやすい。この論文では、混乱を避けるためにハワイ・クレオールという表現に統一したい。

すべてのピジンおよびクレオールには共通の特徴がある。それは、言語の余剰性を切り捨て、統語上の規則性を取り入れ、言語の本質でないものを切り捨てているという点である。田中 (1994) は、ピジンとクレ奥ールの特徴について、言語普遍性に触れて以下のようにまとめている。

(前略) …英語基盤のピジン、クレオールばかりでなく、ほかの言語を基盤とするピジン、クレオールにも共通することが指摘されている。すなわち、音素の数が少ないこと、疑問文と断定文が同じ語順を持ち、イントネーションの変化だけによって区別されること、名詞や動詞などが、人称・数・性・時制などによる語形変化をしないこと、連結詞としての *be* 動詞がないこと、などである (p.199、田中)。

ウォードハウ (1994) も同様に、ピジンとクレ奥ールの特徴を以下のように述べている。

ピジンとクレオールでは、名詞、代名詞、動詞、形容詞における活用がほぼ完全に欠落している。名詞には数や性に関しての有標はなく、動詞には時制を示す標識がない (p.89、ウォードハウ)。

これらの特徴は、当然ハワイ・クレオールにも見られる特徴である。本論では、英語使用者である日本人が話す英語の特徴のいくつかがどのようにハワイ・クレオールに共通しているのかという研究設問から仮説を構築していく。上記の記述から、名詞や動詞が人称、数、性、時制による語形変化をしないことに注目し、これらの項目について日本人英語との比較をしたい。ただし、性による語形変化については、英語においてはそもそも無標であるために比較項目からはずすことにする。今回は、①名詞の語形変化 (数)、②動詞の語形変化 (時制、人称、数) について比較分析したい。

3. 調査方法

今回の調査では、仕事で日常的に英語を使用する30代から60代の日本人のビジネス・パーソン6名を対象者とし、2008年9月～2009年3月までの間に英語でのインタビューを行った。被験者の条件として、学生時代に留学経験など英語圏に長期滞在した経験がなく、大学卒業まで日本国内で教育を受けてきている者を選んだ。ほとんどが企業派遣などで2年～10数年ほどの海外赴任を経験しており、継続的に英語を使って仕事をしている。彼らは、英語での基本的な意思疎通にほとんど問題はない、としている。

3-1 インタビュー調査

6名の被験者にはそれぞれ60分から70分ほどの英語でのインタビューに応じてもらう、という方法をとった。インタビューの内容は主にこれまでの仕事に関わる体験談などに絞り、普段彼らが使い慣れている英語を話してもらうようにした。質問内容は、これまでの仕事の経歴、仕事内容、海外生活の経験、英語との関わりなどである。インタビューは許可を得てすべて録音し、書き起こしたものを分析した。

なお、インタビューの本来の目的については事前に説明をせずに行った。被験者が自分の話す英語を意識して、何らかの方向へ矯正しようとすることを避けるためである。

3-2 調査対象者

C1: case1) K・Sさん (30代・男性)

日本の大学卒業。専攻は中国語。1歳から10歳まで中国で育ち、その後は日本で教育を受けている。海外長期滞在の経験は他にはなし。現在の仕事は自営の貿易業。普段の職場での会話はほとんど日本語。ビジネス上での英語使用歴は20代後半から現在に至るまでおよそ10年間。現在、年間2～3回、10日間前後の海外出張がある。取引先は中近東が多く、出張先は主にタイ、中国、シンガポールなど。

C2: case2) S・Tさん (40代・男性)

日本の大学卒業。専攻は海洋土木開発工学。30歳から33歳まで3年半のマレーシア勤務経験あり。現在の勤め先はフランスの外資系企業で生産技術開発に携わっている。普段の職場での会話は日本語と英語が50%ずつ。ビジネス上での英語使用歴は28歳頃から現在に至るまでおよそ20年間。現在、年間4～5回、各2～3週間の海外出張がある。出張先は主にフランス、ドイツ、ポーランド、韓国など。10年ほど前まではアメリカ、クウェート、サウジアラビア、との取引が多かった。

C3: case3) S・Hさん (60代・男性)

日本の大学卒業。専攻は国際政治学。総合百貨店に勤続し、2年前に退職。主に海外からの仕入れを担当。30歳から33歳までおよそ3年間、香港で勤務。50代の頃2年半インド

ネシアで勤務。ビジネス上での英語使用歴は25歳頃から退職するまでおよそ35年間。定期的に年間2～5回の海外出張があった。一回の出張は一週間から一ヶ月ほど。出張先はドイツ、イタリア、アメリカ、フランス、中国、ベトナム、フィリピン、その他多数。

C4: case4) N・Kさん(60代・男性)

日本の大学卒業。専攻は経済学。大手印刷会社に勤続し、3年前に退職。海外での営業を主に担当。26歳から29歳まで3年間香港に赴任。35歳から41歳まで6年間オーストラリアに赴任。41歳から45歳まで4年間アメリカに赴任。ビジネス上での英語使用歴は26歳から退職するまでのおよそ40年間。海外赴任以外に、海外出張は年間2、3回、一回の出張は短ければ1週間、長ければ6ヶ月。出張先はベトナム、中国、韓国、北朝鮮、その他多数。

C5: case5) S・Yさん(60代・男性)

日本の大学卒業。専攻は商学。石油関連会社に勤務。海外での現地調査を主に担当。33歳から36歳まで3年間、クウェートで勤務。46歳から50歳まで5年間ロンドンで勤務。50歳から52歳まで2年間カナダで勤務。ビジネス上での英語使用歴は26歳(研修のため、11ヶ月間中近東、アフリカ、ヨーロッパ、アジアの各国16カ国ほどを周った)から現在までのおよそ40年間。海外出張は年間4～5回、一回に1、2週間ほど。出張先は中国、シンガポール、イギリス、フランス、ロシア、ベトナム、ドバイ、アマン、エルサレム、エジプト、イラン、イラク、サウジアラビア、その他多数。

C6: case6) S・Aさん(40代・女性)

日本の大学卒業。専攻は英語。秘書兼事務職。ビジネス上での英語使用歴7年。外資系保険会社に5年間勤務の後、退職。育児のため10年ほど仕事から離れ、その後英語学校の秘書兼事務職として勤務して2年目。28歳のとき6ヶ月ドイツに家族と滞在。海外勤務、出張経験はない。

4. 日本人ビジネス・パーソンの英語の特徴

今回比較分析の対象とした文法項目は、前述した①名詞の語形変化(数)、②動詞の語形変化(時制、人称、数)である。インタビューで得たデータから、それぞれの使用・非使用について、さらに使用した場合は使用頻度について数値化した。結果、使用頻度に違いはあるものの、6名のほとんどがこれらの特徴を残した英語を話していることがわかった。

4-1 各比較項目の使用・非使用および使用頻度

6名の被験者がそれぞれ、各比較項目についてインタビューの中で使用したか否か、また使用した場合の使用頻度について以下にまとめた。名詞の語形変化については、ネイティブ話者であれば複数形を使うところで単数形を使った場合に、使用ありと評価する。複数形を使用す

るべき箇所すべてをカウントしそれを100%とし、その中で単数形を使った場合をカウントし、使用頻度をパーセンテージで表した。動詞の時制についても同様に、過去形を使うところで現在形を使用した場合をカウントし、使用頻度をパーセンテージで表している。動詞の人称については、三人称単数形を使うところで-sが欠落した場合をカウントし、さらにbe動詞に表れる数の指標 (are, were) が単数になる場合をカウントし、それぞれ使用頻度を数値化した。

表1 日本人ビジネス・パーソン各比較項目の使用・非使用および頻度

| | C1 | C2 | C3 | C4 | C5 | C6 |
|--------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| 名詞の語形変化 (数) | 使用あり 80% | 使用あり 86% | 使用あり 55% | 使用あり 10% | 使用あり 18% | 使用あり 61% |
| 動詞の語形変化 (時制) | 使用あり 93% | 使用あり 58% | 使用あり 29% | 使用あり 12% | 使用あり 23% | 使用あり 59% |
| 動詞の語形変化 (人稱) | 使用あり 75% | 使用あり 83% | 使用あり 50% | 使用なし — | 使用なし — | 使用あり 41% |
| 動詞の語形変化 (数) | 使用あり 66% | 使用あり 71% | 使用あり 75% | 使用あり 22% | 使用あり 12% | 使用あり 33% |
| インタビュー時間 | 70 min. | 69 min. | 66 min. | 67 min. | 64 min. | 68 min. |

4-2 日本人ビジネス・パーソン各比較項目の例

① 名詞の語形変化 - 複数形

C1、C2、C6の英語で頻繁に観察されたのが、次の例のような名詞の単数形である。C1は80%、C2は86%、C6は61%の頻度で名詞を単数形のままで使用している。

(1) 〈Ah, three or four day not in Tokyo.〉

‘Ah, three or four days. (I’m) not in Tokyo.’ (C1)

(2) 〈Many friend to go with.〉

‘Many friends to go with.’ (C2)

(3) 〈Yes, with my friend..., four friend.〉

‘Yes, with my friend..., four friends.’ (C6)

また、名詞が単数形になるときに、それにもなってbe動詞が三人称単数の形をとる傾向が強い。次の例は、be動詞が欠落した上で名詞が単数形になっているものと、be動詞は存在するものの、名詞同様に単数の形をとっているものである。

(4) 〈10 or around 20 unit in my warehouse.〉

‘10 or around 20 units are in my warehouse.’ (C1)

- (5) 〈There is many interesting place to see.〉
 ‘There are many interesting places to see.’ (C2)
- (6) 〈Those game was done by Japanese working at factory.〉
 ‘Those games were done by Japanese working (workers) at factory.’ (C3)

なお、C4 と C5 の 2 名には名詞の複数形を単数形にするという特徴はあまり見られなかった (それぞれ、C4 が 10%、C5 が 18%)。C4 は海外赴任が合計で 13 年間、C5 は合計 10 年間と、この 2 名は最も海外生活が長い。

②- 1 動詞の語形変化-時制

時制の不一致、今回は特に過去の出来事を動詞の現在形で表現するという特徴について観察した。これは被験者全員に見られた特徴であったが、C4 に関しては頻度が極端に低かったため (12%)、単なるミスタイク³⁾ もしくは意図的であった可能性が高いと考えられる。以下に被験者のインタビューから例を示した。なお、過去形であるべきか否かは、話題や文脈から判断した。

- (7) 〈I start my business 10 years ago.〉
 ‘I started my business 10 years ago.’ (C1)
- (8) 〈I face difficulty with French.〉
 ‘I faced difficulty with French.’ (C3)
- (9) 〈American GIs stay in Hong Kong. They are big and rich.〉
 ‘American GIs stayed in Hong Kong. They were big and rich.’ (C4)
- (10) 〈Gulf war caused..., he is a hostage in Kuwait.〉
 ‘Gulf war caused..., he was a hostage in Kuwait.’ (C5)
- (11) 〈Sometimes I need to use English at work.〉
 ‘Sometimes I needed to use English at work.’ (C6)

次の例では、動詞の活用以外の方法で過去を示している。例えば (12) では already を使うことによって過去を表現している。C1 はこの already を過去の指標として 70 分のインタビューの間に 5 回 (5 回 / 70 分)、例えば “Have you sent them the package?” のような質問に対して、“Yes, already.” のような答え方もしている。また、C2 は例 (13) で at that time を過去の指標として使

用している (4 回 /69 分)。C3 (3 回 /66 分)、C5 (3 回 /64 分) も同様に at that time を使用する傾向はみられたが、C3 と C5 は動詞の過去形と一緒に使用していることから、過去形を示すための代用としての使用ではないことがわかる。

(12) 〈Yes, your sample come already two day ago.〉
‘Yes, your samples came two days ago.’ (C1)

(13) 〈We don’t have any kids in Malaysia at that time.〉
‘We didn’t have any kids in Malaysia at that time.’ (C2)

(14) 〈At that time, one dollar was 360 yen.〉 (C3)

ただのミスエイクなのか、エラーなのか、体系的な特徴と呼べるものなのか、それは使用頻度から判断できる場合もある。例の (12) や (13) のようにある程度の規則性を持った場合には、それは英語を第二言語とする英語使用者が確立した特徴の一つ、と呼べるのかもしれない。

②-2 動詞の語形変化-人称

C1、C2、C3、C6 の英語には主語が三人称単数形の場合に動詞の -s が欠落する、という特徴が見られたが、C4、C5 の 2 名に関しては、この特徴は見られなかった。

(15) 〈He want product, but it’s expensive.〉
‘He wants the product, but it’s expensive.’ (C1)

(16) 〈One French expert, he sit beside me.〉
‘One French expert, he sits beside me.’ (C2)

(17) 〈Our company have bad influence.〉
‘Our company has bad influence.’ (C2)

(18) 〈He speak perfect sentence.〉
‘He speaks perfect sentences.’ (C6)

ほとんどの場合は三人称単数形の -s が欠落するが、C1 と C2 には、has の代わりに have を使用するというケースが観察された。主語が I や you の場合に動詞の活用形を使用するという逆のパターンは見られず、これはピジン・クレオールの特徴にも共通する。動詞は活用をせず、

基本形のみが使用され、文脈から内容を理解するのである。

②-3 動詞の語形変化-数

名詞の複数形を使用しないことと同様に、動詞も主語の数に関わらず語形変化をしないという特徴が見られた。ただし、(19)に見られるように、主語が単数形であるために動詞が主語と一致した、という可能性も考えられる。しかし、文脈から考えられる話者の意図を推察すると、やはり動詞が語形変化をしない、という特徴の一例と思われる。なお、他の比較項目と比べると、頻度は低いもののすべての被験者にこの特徴はあらわれている。

(19) 〈Many bicycle has problem.〉
 ‘Many bicycles have problems.’ (C1)

(20) 〈But there is many unemployee people.〉
 ‘But there are many unemployed people.’ (C2)

(21) 〈Japanese business men was poor.〉
 ‘Japanese business men were poor.’ (C4)

(22) 〈Bedouins is very proud of their lifestyle.〉
 ‘Bedouins are very proud of their lifestyle.’ (C5)

be 動詞が語形変化をせず、主に is と was が使われるという特徴は①の名詞の語形変化でも述べたとおりである。be 動詞が欠落することとも関わっており、これはピジン・クレオールにも見られる。この項目の使用頻度が他の項目に比べて低い理由も、そもそも be 動詞の使用を避けているためであると考えられる。文脈における be 動詞の重要性の低さが指摘される(ウォードハウ、1994)のも、このためである。

4-3 インタビュー調査の結果

6名の被験者をインタビューした結果、全員に見られた特徴は①名詞の語形変化(数)、②-1の動詞の語形変化(時制)と、②-3の動詞の語形変化(数)についてである。しかし使用頻度にはバラつきが見られ、特にC4とC5については頻度が非常に低い。さらに、②-2の動詞の語形変化(人称)については、被験者C4とC5にこの特徴が見られなかった。しかし、インタビューの後にC4から興味深い話が聞けた。

「聞き苦しい英語で申し訳ない。研究者の方々はきれいな英語に慣れていて、きれいな英語を高く評価するのだから恥ずかしい。しかし、仕事をこなしコミュニケーションをとるこ

とが最優先で、英語の細かいことを気にして話すことをとまどったり、黙ったりすることはできない。私は内容を重視してきたし、ビジネスの相手も私の仕事内容を評価してくれた。英語には注意を払わなかった。その結果、このような洗練されていない英語を話すようになってしまった(2009年3月21日のインタビューより)。」

さらにC5も同様の意見を持っており、「私の英語は完璧ではないでしょう。でも、これで十分なのです(2009年3月21日のインタビューより)」と話している。今回は被験者の意識は調査対象にしていなかったため、他の被験者の考えは聞き出せなかったが、今後注目に値するものと考えている。

今回の比較項目以外にも、興味深い特徴がいくつか見られたが、それはハワイ・クレオールとの比較の後に記すことにする。次に比較項目に関するハワイ・クレ奥ールの特徴をまとめた。

5. ハワイ・クレオールと日本人英語の文法的類似点

今回の比較項目について、記録されているハワイ・クレオールから例を取り出し共通する点を挙げてみる。

5-1 ハワイ・クレ奥ールの各比較項目の例

ハワイ・クレオールには多くのピジンやクレ奥ールの特徴に共通する点がある。その中で、今回取り上げた項目についてそれぞれ例を挙げると、以下ようになる。

① 名詞の語形変化－複数形

多くのピジンやクレオールがそうであるように、ハワイ・クレオールにも名詞の複数形を表す-sが脱落するという特徴がある。

(27) 〈Dog loyal, not like cat.〉

‘Dogs are loyal, not like cats.’ (Sakoda & Siegel, 2003, p.35)

(28) 〈Young fellow they no do that.〉

‘Young fellows don’t do that.’ (ビッカートン、1985, p.26)

複数形は通常、文脈から理解されるため脱落する機会が多いが、複数形を示す-demを名詞の直後に置くことによって複数を示すこともある。次の例はハワイ・クレオール話者のものである。

(29) 〈Kent dem inside the house.〉

‘Kent and others (are) inside the house.’ (Sakoda & Siegel, 2003, p.78)

今回の調査で被験者となった日本人英語使用者には、このような体系的に複数形を示す語は観察されなかった。

②- 1 動詞の語形変化-時制

多くのピジンやクレオールの特徴でもあるように、ハワイ・クレオールでは動詞の語形変化を使用せず、過去形は過去を示す記号などで補っている。動詞は原型のまま、動詞の前に過去を示す *wen* (もしくは *bin* または *haed*) を使用する。たとえば、「スタンダード英語」⁴⁾ の *sing/sang* はハワイ・クレオールでは *sing/wen sing* のように表記される (Sakoda & Siegel, 2003, p.68)。

(30) 〈You wen fail already.〉

‘You failed already.’ (Sakoda & Siegel, 2003, p.44)

(31) 〈They wen go up there early in the morning go plant〉

‘They went up there early in the morning to plant’ (ビッカートン、1985, p.35)

(32) 〈I bin clean up my place for the holiday.〉

‘I cleaned up my place for the holidays.’ (Sakoda & Siegel, 2003, p.40)

日本人の英語の場合、ここまで体系的な規則は確立されていないが、過去形を使う場合は何かしらの過去を示す語で文を補っている場合がある。C 1 の例である (12) の *already* などは、(30) の *already* と同様の使い方をしており、これはピジンやクレオールでは典型的な過去を示す表現方法である。ハワイ・クレオールでも *already* の使用は顕著で、“You been (bin) eat lunch already?” のように使われることもある (Carr, 1972, p.121)。

②- 2 動詞の語形変化-人称

ピジンやクレオールでは、主語の性や数によって動詞が語形変化することはほとんどなく、常に基本または無標の語形が使われるという共通性がある。そのため、主語と述語の一致は存在しないのである。この点で、今回の調査では6名中4名に共通点が見られる。これは、フィリピン英語などにも見られる特徴である (芝田、1990)。

(33) 〈He play baseball.〉

‘He plays baseball.’ (Sakoda & Siegel, 2003, p.56)

(34) 〈My father carry them.〉

‘My father carries them.’ (Sakoda & Siegel, 2003, p.56)

また、否定に関しては人称による活用の非用が体系的にあるため、言いかえが避けられている。例えば、don't や doesn't は no で代用するという規則があり、She no want come. (She doesn't want to come.) や、I no like you, brother. (I don't like you, brother.) のように表現される。

②-3 動詞の語形変化-数

ハワイ・クレオールにおいては、そもそも be 動詞の欠落が頻繁にみられるため、be 動詞の言いかえはほとんど見られない。(27) や (29) の例文でも be 動詞が欠落している。また、主語に関わらず be 動詞の代用として ste/stei/stey/stay などのいずれかを使用するため、be 動詞の言いかえを避ける結果となっている。

(35) 〈She stei sick.〉

‘She is sick.’ (Sakoda & Siegel, 2003, p.77)

これとは別のスタイルで動詞不在の文もハワイ・クレオールには存在する。次の例のように語順が変わり、さらに be 動詞の非用が見られるケースもある。

(36) 〈Ono the malasadaz.〉

‘The malasadas are delicious.’ (Sakoda & Siegel, 2003, p.78)

(37) 〈Too long the words.〉

‘The words are too long.’ (Sakoda & Siegel, 2003, p.78)

ハワイ・クレオールの方が日本人英語に比べて、より体系的で規則性を持つてゐるが、これはピジンよりクレオールがより発達した言語であることを考えると、当然である。日本人英語は理論上ピジンであり、クレオールほど洗練されていないのである。しかし、それにしても日本人英語とハワイ・クレオールの基本的な共通点は、はっきりと観察することができた。

5-2 その他の類似する特徴

被験者から得たデータには疑問文と断定文が同じ語順を持つことなど、その他のハワイ・クレオールとの類似点も多く見られた。中でも興味深い点は、already の使用、be 動詞の欠落、そして反復の使用である。

・ already

前述したように、already の使用範囲は広い。日本人英語のデータでは例(14)、ハワイ・クレオー

ルの例では (30) に見られるように、過去を示す補語として使われている。ピジンやクレオールだけでなくすでにニューイングリッシュとして市民権を得ており、シングリッシュとして知られているシンガポール英語でも、already は完了の意味を表す語として使われている (中村、1990)。マレーシア英語でも同様に already は完了時制を強調するものとして使われていることがわかっている (野村、1990)。

・ be 動詞の欠落

例えば、(4) の C 1 の英語からは be 動詞の are が欠落している。以下に挙げるように、それ以外の被験者の英語にも be 動詞の欠落が多く観察された。

- (38) 〈Thailand not so cold.〉
 ‘Thailand is not so cold.’ (C2)
- (39) 〈Some good, some not so much.〉
 ‘Some were good, some not so much.’ (C3)
- (40) 〈That right.〉
 ‘That is right.’ (C4)
- (41) 〈This my responsibility.〉
 ‘This is my responsibility.’ (C5)
- (42) 〈That enough for me.〉
 ‘That is enough for me.’ (C5)
- (43) 〈I just going around myself.〉
 ‘I was just going around myself.’ (C6)

ピジンとクレオールに共通する特徴にも、連結詞としての be 動詞は欠落するケースが多いと指摘されている。ハワイ・クレオールの特徴では以下の例のような be 動詞の欠落が挙げられている。ただし常に欠落するわけではなく、頻度には個性があるとしている。これは日本人の被験者にも同様のことが観察された。

- (44) 〈Dog smart.〉
 ‘The dog is smart.’ (ピッカートン、1985, p.26)
 (「馬と犬とでは、どちらがかしこいか」という質問に対して)
- (45) 〈She talking to herself.〉
 ‘She is talking to herself.’ (Sakoda & Siegel, 2003, p.60)

・反復

今回の調査で、反復を使用したのはC1とC3の被験者のみであったが、ピジンやクレオールには反復表現が多いことが観察されている。次の例は、C1とC3の発言である。強調したいことを表現するために、反復を使用していることがわかる。

- (46) 〈I sell sell old one to not rich country.〉 (C1)
(47) 〈I ask my staff to go go.〉 (C3)
(48) 〈Hong Kong was very very, for me, was like a jail.〉 (C3)

ウォードハウ (1994) は、ピジンやクレオールでは強調の概念を示すために反復のパターンを使うことがある、としている。talk (話す) / talktalk (ぺちゃくちゃしゃべる)、dry (乾いている) / drydry (食べ物がまずい)、look (見る) / looklook (じっと見つめる)、cry (泣く) / crycry (泣き続ける) といった例を挙げている。また、日本における浜松ピジン⁵⁾にも同様の特徴が見られ、saymo-saymo (同じような、similar, alike)、hubba-hubba (急いで、hurry)、などがある (マーハ、2004)。同様に、インド英語やマレーシア英語にもこのような反復は多く観察されている (ブリットー、1990)、(野村、1990)。

今回の調査による日本人英語の特徴とハワイ・クレ奥ールの特徴を比較した結果、数による名詞の語形変化がない、時制による動詞の語形変化がない、人称による動詞の語形変化がない、という三つの点については共通点が見られた。四つ目の比較項目であった、数による動詞の語形変化については、ハワイ・クレオールではbe動詞の非用が目立ったために比較できなかった、という結果になった。また、比較項目以外のいくつかの共通点も観察することができた。

6. 考察

6-1 調査のまとめ

今回の調査は、少ない被験者をインタビューしてデータを得た質的研究であるため、一般的な結論を述べることはできない。しかし、日本人英語使用者の英語を記録し、その特徴を記述し、発達過程そのものを研究対象として分析することは重要であると考えている。

少なくともビジネスで英語を数年～数十年使っている日本人の英語にも同様の特徴が見られることはわかった。そして、それらのいくつかは世界中で使われているピジン英語やクレオールに共通する特徴があることもわかった。今後も調査を続けることで、日本人英語使用者の英語がピジン英語やクレオール、さらにはアジア各地のニューイングリッシュに共通する普遍性を持つということが明確になるかもしれない。

6-2 英語学習上のエラーか、日本人英語の特徴か？

どこまでが英語学習者で、どこから英語使用者といえるのだろうか。話者の意識の違いというだけではない。30年以上英語を使用してビジネスをしてきた人でも、「私の英語はつたないものです。まだまだ勉強中です。」と話す。おそらく、学習者と使用者の間に明確なラインはない。学習しているという意識がないままに英語を使用している場合でも、学びながら使用しているのである。実際、ピジンはそのようにして生じている。

それでは日本人が英語で話す際に犯すエラーは、それが長年使われた場合にエラーの化石化であると判断するべきであろうか？それともそれは英語と他の言語が接触したときに必然的に起きるピジン化の一種ととらえるべきであろうか？本論では日本人ビジネス・パーソンが使用する英語は未熟なものではなく、ある種のピジン化の結果生じた日本人英語の特徴であると考えたい。なぜなら、ハワイ・クレオールやニューイングリッシュと多くの共通点を持っているにもかかわらず、日本人英語だけがエラーであると考えようが不自然だからである。

日本人英語がある種のピジン化の結果であるとして、それがクレオール化しない理由は日本人のピジン英語で子供が育つ環境がないからである。日本人英語がクレオール化すれば、より統語的に洗練された英語となり定着する可能性もある。しかし、日本社会において日本人同士で英語を使用する必要性がないために、クレオールに発展する可能性はほとんどない。ウォードハウ (1994) によると、ピジン化は繰り返し何度も起きたであろうし、今でも起きているという。全てのピジンが必ずしもクレオールになるわけではなく、事実クレオール化を得るものはほとんどない。ピジンは他の言語を使う人々が自分たちの必要性を満たすために話しているのであって、使用者から次の世代へ受け継がれることは少ないのである。

日本人の英語使用者が使う英語は、それぞれの中でピジン化し、その人が使わなくなれば自然に消滅していく。その繰り返しなのである。それでも興味深い事実は、地域や時代の違いを超えて多くのピジンやクレオール、そしてニューイングリッシュと呼ばれる英語が多くの類似点を持っているということである。

ピジンは、不完全に学習された標準語、すなわち徹底的に学習する能力や機会が足りないために標準変種語を学習することが不完全であったというものではないし、また単に単純化という過程を経た結果発生したものでもない。もっと大事なことは、どの言語を基盤にしようかと、ピジンには全て明らかに同じ特徴のいくつかを共有しているということである (ウォードハウ、p.98、1994)。

このことから考えると、ピジンやクレオールさらにはニューイングリッシュにも共通する特徴をもつ日本人英語使用者の英語だけが単なる日本人のエラーであるとは考えにくい。日本人の英語は、日本人独特のエラーを繰り返し犯している未熟な言語ではなく、必然的な理由から必然的な特徴を兼ね備えた英語の一種なのではないだろうか。

以下に挙げるのは、1950年代から1960年代半ばまで非常によく知られていた Cinderella-san というピジン英語で書かれた物語である。これは日本と韓国の軍事基地で兵士たちの間で出

回っていたものであるという。この英語には、日本語や韓国語が混ざっている様子がわかる。Webster (1960) は、これは実際に使われている話し言葉よりも、ずっと流暢なかたちになっている、と説明している。本来話し言葉であるピジンを書き出したことによって、多少フォーマルになったと考えられる。しかしそれでも、ピジンの特徴を数多く残している。

Taksan years ago, skoshi Cinderella-san lived in hootchie with sisiters, poor little Cinderella-san ketchee no fun, have-no social life. Always washee-washee, scrubee-scrubee, make chop-chop. One day Cinderella-san sisters ketchee post cardo from Seoul. Post cardo speakie so: one prince-san have big blowout, taksan kimchi, taksan beeru, play 'She Ain't Go No Yo Yo'. Cindy-san sisters taksan excited, make Cinderella-san police up clothes.

(Webster, 1960, p.261)

Taksan = たくさん skoshi = 小さい、少し hootchie = 家 washee-washee = 洗濯
scrubee-scrubee = 掃除 chop-chop = 食べ物 kimchi = キムチ

ketchee (catch) や have など主語にかかわらず語形変化をしない動詞や、washee-washee や scrubee-scrubee などの反復表現が使われているのがわかる。このようなピジン化した日本人の英語は歴史上、いくつも存在したことがわかっている。浜松ピジンなどの軍事基地ピジン、イギリス、フランス、イタリア、ポルトガル、ハワイ、タヒチからの人々と接触の多かった小笠原の小笠原ピジン、1800年代から1900年代初頭に横浜港の商人が使っていたとされる横浜ピジンなどがそれにあたる (マーハ、2004)。

現在、日本のビジネス・パーソンが必要に迫られて使用している英語も、過去に横浜の商人が商売をするために話した横浜ピジンに類似していても不思議ではない。今後さらに調査を続け、ピジンやクレオールが存在をふまえた日本人英語の可能性について考えたいと思う。

6-3 今後の課題

今回は調査対象者が6名と少人数であり、また限られた比較項目に関する言語活動を観察したため、結論を一般化することはできない。しかし、今後も観察を続けることによって縦断的研究につなげていきたい。また、被験者の数を増やし、より多くの比較項目の詳細な統計をとり、量的研究を行うことも必須である。そのように日本人英語の特徴とパターンを記録し、分析することで日本人英語が市民権を得る一つの理由づけとなれば、と思う。

また、商談の相手がどのような英語を話すのか、ということに左右されることも考慮に入れるべきである。今回の調査の場合、被験者がビジネス上話す相手はオーストラリア人、ロシア人、イラン人、中国人、など幅広く、相手の話す英語もバラエティーに富んでいる。実際に、国際的に活躍するビジネス・パーソンは様々なバラエティーの英語に触れながら仕事をする場面が多い。今後の課題として、接触場面別の分析も必要であると考えられる。

今後より研究をすすめることによって、日本人の英語がピジンやクレオールに見られるような普遍的なパターンに沿ったものであるという仮説を検証していきたい。それが日本人の英語を未熟なものとして劣等視してきた態度を変える1つのきっかけになれば、と思う。

注

- 1) ジャイムズ・H・M・ウェブ (1991) 『日本人に共通する英語のミス 121』 ジャパン・タイムズ、ピーター・シュナイダー / ジェーン・シュナイダー (1989) 『日本人英語へのちょっとしたアドバイス』 大修館書店、ピーター・ミルワード (1980) 『英語の語法診断 日本人英語の誤り』 南雲堂
- 2) 西村公正 / ポール・ケリー (1996) 『日本人英語のミス』 研究社出版、マーク・ピーターセン (1988) 『日本人の英語』 岩波書店
- 3) ミステイクは不注意などから生じる言い損じや言い誤りで、体系的でない誤用を指す。それに対して、エラーはある程度体系的に現れる誤用を指す。
- 4) ハワイ・クレオールの研究では、アメリカの標準英語を standard English と表記する (Carr, 1972)。
- 5) 日本でもいわゆる「軍事基地ピジン」が観察されている。浜松ピジン、横浜ピジンなどがそれにあたる。そのほか、日本語とスペイン語のピジンである「長崎ピジン」や外国人労働者の間で発達した「Gastarbeiter ピジン」なども存在し、日本が多言語的環境であったことを示している (マーハ、2004)。

参考文献

- Carr, E. (1972). *Da Kine Talk: From Pidgin to Standard English in Hawaii*. Honolulu: The University Press of Hawaii.
- Hancock, I.F. (1977). Appendix: Repertory of Pidgin and Creole Languages. In
- Valdman A. (ed.) *Pidgin and Creole Linguistics*. pp. 277-294. Bloomington: Indiana University Press.
- Holm, J. (1988). *Pidgins and Creoles*. 2 vols. Cambridge: Cambridge University Press.
- Honna, N. (2008). *English as a Multicultural Language in Asian Contexts: Issues and Ideas*. Tokyo: Kurosio Publishers.
- Maher, C. J. (2001). North Kyushu Creole: A Language-Contact Model for the Origins of Japanese. *Multicultural Japan*, pp.31-45. Cambridge University Press.
- Romaine, S. (1988). *Pidgin et Creole Languages*. New York: Longman.
- Sakoda, K., & Siegel, J. (2003). *Pidgin Grammar: An Introduction to the Creole Language of Hawai'i*. Honolulu: Bess Press.
- Todd, L. (1974). *Pidgins and Creoles*. London: Routledge & Kegan Paul.
- Webster, G. (1960). Korean Bamboo English Once More. pp.261-265. *American Speech*, 35.
- ウォードハウ、ロナルド (1994) 「ピジンとクレオール」 pp.76-117. 田部滋・本名信行監訳 『社会言語学入門 上巻』 東京：リーベル出版
- 大島希巳江 (2001) 「国際言語としての多様な英語と日本の英語学習 - 多文化言語・ハワイのピジン英語の例 -」 pp.39-56. 『異文化コミュニケーション No.4』

- 芝田征二 (1990) 「フィリピンの英語」 pp.157-192. 本名信行編『アジアの英語』東京：くろしお出版
- 田中幸子 (1994) 「ピジンとクレオール」 pp.183-202. 田中春美他著『入門ことばの科学』東京：大修館書店
- 中村良廣 (1990) 「シンガポールの英語」 pp.95-118. 本名信行編『アジアの英語』東京：くろしお出版
- 野村亨 (1990) 「マレーシアの教育と英語」 pp.119-156. 本名信行編『アジアの英語』東京：くろしお出版
- ビッカートン、デレック (1985) 『言語のルーツ』東京：大修館書店
- ブリッター、フランシス (1990) 「インドの英語」 pp.213-236. 本名信行編『アジアの英語』東京：くろしお出版
- マーハ、C. ジョン (2004) 「日本におけるピジン・クレオール言語の歴史」 pp.173-185 『教育研究 46号』国際基督教大学

(2011.9.14 受稿, 2011.11.22 受理)